

八幡空襲と小皿

宗像市 安永 哲子

昭和20年8月8日、北九州八幡が米軍のB29爆撃機によって空襲を受けた日である。その日から今年が50年目を迎える。私はその日のことを一生忘れることはない。いや、忘れようにも脳裏に深く刻み込まれて、消すことのできない日なのである。私たち一家は家を焼かれ、家財を焼かれて『戦災者』にさせられ、その後の運命を大きく狂わされた日だからである。八幡空襲がなかったら、私の生活は現在のものと異なっていたことは確実！

私は、昭和9年生まれ。今年が60才になる。昭和16年4月八幡市（現在の北九州市）前田国民学校に入学（この年、小学校から国民学校になった）。その年の12月8日に太平洋戦争が始まった。私が大好きだった「よみ方」の教科書は、「ススめ、ススめ、ヘイタイススめ」から始まった。登校するときは、「奉安殿」の前で深々と頭を垂れることを教えられた。「奉安殿」の中には天皇陛下と皇后陛下の写真が納められているとのことだった。「天長節」など学校の儀式には校長先生が講堂の壇上で白い手袋をした手で「教育勅語」を読まれ、天皇陛下の写真を掲げてある壁面の幕を開閉された。その間、私たちはじっと下を向いたままで、鼻水を「ズル、ズル」すする音さえたてられなかった。

戦争は学年が進むにつれて、日本国内にも深い影を落としてきた。各家に防空壕が掘られ、登下校の時は1年生から6年生まで集団で行った。校門を入るときに6年生が「歩調とれ！」と号令をかけると、私たち下級生は足を直角に上げて歩かねばならなかった。耳と鼻を手でおさえて机の下に伏せるといふ防災訓練も行われた。防空頭巾をいつも持ち歩き、モンペしか着られなかった。ゴムのズックは配給制、食べ物も配給制で日々に乏しくなった。大豆や大豆のしぼりかす（これは家畜のえさ）が私たちのおやつであった。私たちはいつもお腹を空かせ、栄養失調になってしまった。

昭和20年4月、私は5年生になった。この年はわが家にとって災難の極みだった。その一つは私が生まれ育った堀川町の家が強制疎開にかかったことである。私たちの思い出を包んだまま家は無残にも引き倒されてしまった。通りを一つ隔てた祇園町は、なぜか疎開にかからなかった（現在も祇園市場として賑わっている）。移転する家を求めて母は、友達の家のある黒崎の八千代町に家財を運んだ。当時のわが家は母と姉二人に私という全くの女世帯であった。現在のように車もあまり使えない時代に40代半ばの母が経済的、労力的に苦労したが、今から考えてもぞっとする。母は徴用で八幡製鉄所の前田寮に勤めていた。上の姉は家を守り、下の姉は八幡製鉄所の本事務所（戸畑）まで勤めに出かけていた。私たち3人は職場や学校までの道のりが今までより遠くなったことに不便を味わった。それぞれが今までより早い時間に家を出なければならなかった。

昭和20年8月8日、その日は八幡の空は晴れており、朝から夏の太陽がいつものように昇

っていた。蟬も賑やかに「生」のシンフォニーを奏でていた。いつもの通り母と私は家を出て、坂をいくつも越えて前田国民学校まで歩いてきて、校門の前で別れた。

8時か9時頃であったろうか、警戒警報のサイレンが鳴った。いつもはすぐ解除になるので、先生たちは登校してきた児童をつれて氏神さまに戦勝祈願に出かけた。8日が開戦記念日だったので、『日本が戦争に勝ちますように』と手を合わせた矢先のことである。急に「バリ！バリ！」という音がして焼夷弾が頭上から雨のように降ってきた。いつもと異なる空襲に驚いて、私たちは急いで学校をめざして一目散に走った。前田国民学校の運動場の真中に防空壕が掘られていた。一刻を争って私たちは壕に飛び込んだ。担任の川上先生と暗い壕に入っていた（なぜか私のクラスは私一人しかいなかった）が、怖さで先生の手をしっかりと握りしめていた。壕の中は冷たい空気が流れ、床面には水がたまっていた。足を浸すとひんやりとして気持よかった。地上では、「ドスン！バリ！バリ！」という音が絶え間なく響いており、その度に私は生きた心地はしなかった。今まで学校で行った防災訓練は役に立たなかった。ただ生きた心地はしなかった。いつ、この壕がやられるかという恐怖の中にいた。

どれだけの時が経ったのだろうか。水に浸した足がふやけてしまったころ、やっと地上の音は消えていた。そっと壕の蓋を上げてそこに見たものはこの世の地獄であった。朝の輝いていた陽光は消え、黒い煙とキナ臭い空気が立ち込めていた。八幡製鉄所の方向は赤い炎が立っていた。校舎のガラスも破れていた。呆然として立ちすくんでしまった。

母が顔を「すす」で黒くして校庭に姿を現したとき、私は無言で母に抱きついた。

「あっ！生きていてよかった！」

母と私はわが家をめざして学校を後にした。焼夷弾で焼けている町並みを避けながら道を歩いた。馬が倒れている。爆弾で腹わたを引きちぎられている。熱さよけに両耳の間にわらで編んだ「馬の編み笠」がそのまま頭を守っているのが哀れをさそう。馬方といっしょに仕事をすはずだった動物の死は、もの言わぬ存在であるだけに50年経った今でも印象深く心に焼き付いている。感傷に浸ることもできず、朝に何事もなく歩いた道を今は目と鼻を押さえながら家に向かう。母は「家はどうなったやろうねえ。焼けないでいるやろうか？」と私に語りかけた。私も母と同じ思いであった。いよいよ家の近くまで戻った。

わが家は……と探すと「ない！」のである。隣りの家は残っているのに、わが家の影も形もない。すべてが灰になっていた！。まだ熱い灰の中に本棚に並べてあった本の文字が読める形で残っている。「世界文学全集」や「日本文学全集」は亡くなった父の愛蔵書だったのに、すべて灰になった。父の遺品は無残にも空襲によってこの世から消されてしまった。悔やんでも悔やみきれないのである。

母は、家の焼け跡に生活に必要な品物を掘り出しに行った。熱で変形した鍋と、黒く焦がされた茶わんや皿などを掘り出してきた。この茶わんや皿類は変形していた。母がお客にもてなすために使った器にはそれぞれの生活と歴史がこめられている。焼け跡の茶わんや皿などはあれからの50年のうちに散らばってどこかへ姿を消してしまった。

ところが小皿が1枚だけ私の手元にあるのである。何の変哲もない手の平に入るだけの小皿なのだが空襲の熱で変形している。表面から見ると「少し変形してるな」と思うのだが裏にかえすと両端が浮き上がってしまうのだ。小皿は何も語らないけれども八幡空襲の確実な証拠品なのである。形のある物は焼けてしまって、私の心の中にだけ大きな位置を占めている。しかし、この小皿を手にとる時には、母がこの小皿に盛りつけていた黒豆や台所の様子や母の白いかっぼう着姿も確実に浮かんでくるのである。この小皿を見て、手にとることは私の少女時代や八幡の生活、戦災後に経験した苦しい生活などこの50年の歴史を伝えてくれるのである。空襲の「生き証人」的存在なのである。小皿を眺めると戦争で失った生活が惜しまれてならない。この小皿と共に、私の今後の生活は平和の尊さを語り継ぐ義務があるのではなからうか。

八幡空襲の翌日、長崎に原爆が投下された。ソ連の参戦を受けたことを新聞で知った。8月15日、戦争は終わった。私たち一家は無一物で戦後の荒波にのみこまれてしまった。